

折に触れ 四字熟語

NO. 57 『秋風冽冽』 しゅうふう れつれつ

< 意味 > 秋風の厳しく冷たいさま。

< 出典 > 『文選』 もんぜん 左思 さし 「雑詩」

詩意 秋の夜の月の中で、身の老いを今さらに感じ、若い志にたがった人生を独りものわびる詩

| | |
|-------|-----------------|
| 秋風何冽冽 | 秋風 何ぞ冽冽たる |
| 白露爲朝霜 | 白露 朝霜と爲る |
| 柔條旦夕勁 | 柔條は旦夕なに勁きも |
| 綠葉日夜黃 | 綠葉は日に夜に黄なり |
| 明月出雲崖 | 明月は雲崖に出で |
| 皦皦流素光 | 皦皦として素光を流す |
| 披軒臨前庭 | 軒を披きて前の庭に臨めば |
| 嗷嗷晨鴈翔 | 嗷嗷として晨の鴈は翔る |
| 高志局四海 | 高き志をもて四海を局しとせしも |
| 塊然守空堂 | 塊然として空堂を守れり |
| 壯齒不恆居 | 壯齒 恆には居らず |
| 歲暮常慨慷 | 歲 暮れて 常に慨慷す |

通 釈 : 秋の風は、なんという寒さ厳しいことであろう。この前まで夜の露が降っていたのに、いつしか朝の霜が降り始めた。若枝も、朝な夕なに時とともにこわくなってきたが、緑の葉は、日に夜にと黄ばみしぼんで行く。明るい月が、雲の端から現れ出で、しらじらと、そのさえわたった光を辺りに流し出す。長廊の窓を開いて、前の庭をながめ見ると、鳴き交わしながら、明け方の雁が天駆けて行く。思えば高い志を取り持って、世界をも狭苦しいと見ていたが、今は独りわびしく、人けない部屋にこもっている。若い年ごろは、変わることなく続くものではない。秋が暮れて老い果てれば、いつも嘆き悲しむのだ。

語 釈 : 「皦皦」は白く光るさま。「素光」は白い光。「嗷嗷」は雁がわびしげに鳴くさま。「壯齒」は少壯の年ごろ。「慨慷」は嘆き悲しむ。

一 言 : 秋シリーズその5

全釈漢文大系では作者欄は字の左太沖となっており、雑詩は詩の題名ではありません。

「文選（もんぜん）」は、中国の周から梁まで約千年間にわたる代表的文人の詩文の選集です。

参照文献： 集英社「全釈漢文大系」第29巻 三省堂「四字熟語辞典」